麻生区文化協会会報
41

絵と文・志村幸男

本殿階段を登り社殿を仰ぐ
――琴平神社――

王禅寺ふるさと公園に隣接し、丘陵の連なる丘の伊勢山に琴平神社は鎮座しています。

創建は、元亀年間とも伝えられていますが代々伝わる古文書には、正徳元年（一七一一年）、伊勢山の地に「神明社」が祀られていたと記され、その文によると「崇源院様（徳川二代将軍秀忠の正室）ご繁栄の砌、祈祷所として当村鎮守大神宮を勧請致しこれまで年々伊勢踊、神事祭礼、湯立、神楽等仕え来たり当村の鎮守に御座候」とあります。

その後文政九年（一八二六年）二十八ヶ村名主志村文之丞が、四国の金刀比羅宮の祭神を勧請し、「神明社・琴平社」の合社として再建されました。以来「柿生のこんぴらさん」として親しまれています。江戸時代（桃園天皇時代・一七五三年）金刀比羅宮が「日本一のお山」と信仰され、庶民の間にも金刀比羅参りが流行し、以降日本各地に金刀比羅宮が勧請されました。琴平神社は、神明社と琴平社の相殿のお宮として二柱の神様が祀られています。

地域に応える文化活動を期待

会長　京（みやこ）　利（とし）幸（ゆき）

出会い、そして…

私と麻生区文化協会の出会いは、麻生市民館へ異動した平成九年（一九九七年）四月でした。そこで、かつて仕事で大変お世話になった諸先輩が文化協会で生きいきと活躍されているのに目を見張りました。私も退職後は、諸先輩を見習って地域で活動をしてみたいと、その時、思ったものです。

私の気持ちを察したのか、平成十三年三月の退職時には、文化協会の会員として文化サロン部の籍が用意されていました。その部会に主体性の無い会員として五年間在籍していた私に、会長への声がかかりましたが、何度もお断りしました。

これまで築いてきた伝統と歴史のある麻生区文化協会の運営に携わることへの責任の重さに、役員経験が無く文化的資質に乏しい若輩の私には務まらないという気持ちが強かったのですが、杉本会長にいつまでも託するのは酷すぎる。組織はいつかは誰かが受継ぎ次へと繋げていくことが大切です。私はハムレットの心境になり、どうしても後任を受ける会員がいないならば、杉本会長の後を継ぐしかないのかなと心が傾いていきました。

幸いにして、三人のベテランの役員と各部門にもベテランの部長や委員・会員がおり、安心してそれぞれの活動をお任せできるのは心強い限りです。

一本の電話に

先日、電話のベルで受話器を手にすると、「キョウさん宅ですか？」私は長年の習慣で咄嗟に「違います」と応えていた。住宅や墓地等の売込みと思い、名前を正確に呼ばない限り対応しないことにしている。耳元から離そうとした受話器から「文化協会会長さん宅ですよね？文化祭への出演日程を教えて下さい」という会員らしき人の声が聞こえてきた。私は返事に窮し、その後どう応えたのか自分でも恥ずかしいくらいうろたえました。電話の相手に不愉快な思いをさせてしまい、申し訳ありませんでした。文化協会には大変難しい名前の会員が大勢おりますので、早く名前を覚え、その人の人格を傷つけないようにしたいものです。

文化と福祉の共生活動を創る

麻生区文化協会は二十一年前、身近に文化施設を要望した運動に情熱を燃やした文化人や芸術家等と地域で多彩な文化・芸術活動を営む団体や個人が結集して設立されました。その人たちが麻生の地に文化の灯をともし続けて今日が在ることに、私は感動を覚え敬意を表したいと思います。

この原動力を軸に据え、これからの文化協会に求められることは、健康で生きがいのある人生を心豊かに過ごすことのできる時と公共空間を提供することだと思います。

折しも、二〇〇七年問題といわれる団塊世代の大量退職者が地域社会にあふれることが予測されます。

この人たちが地域社会で過ごすことの出来る居場所の選択肢の一つに、文化協会の活動が提供され、そこで仲間づくりができ、新たな自分発見や生きがい開発に繋げてゆくことができれば、文化協会のこれからの魅力ある活動となっていくにちがいありません。

アマプロ陶芸四十年の事始め

アカデミー部　田中敏雄

◎昭和三十九年四月一日　私は世田谷区立K中学校長として赴任した　そこは　多摩丘陵の頂上を平らにした　広々とした校地であった　教頭さんの案内で　校舎を一巡した私の　新任校長という甘い夢は　一遍に吹っ飛んだ

◎廊下は　あちこちに穴が開いていて　気をつけないと危ない　教室に入ってみると　床にベニヤ板が敷いてある　持ち上げてみると大きな穴が開いているのである　全教室の窓ガラスは　半分以上割られたままである　体育館の裏庭には　タバコの吸い殻が　一面に散らかっている　私は息を飲んだ　これが　公立の学校であろうか

◎翌日　私は先輩のFさんが　世田谷の問題校S中を治めていたので　教えをうためにに　電話した

「Fさんは　どうやった?」

「一年間は手をつけるな　じっと見学してろよ　その間に仲間をたくさん作っておけ　決して短気をおこすなよ」

◎私は初めての全校朝会で　半分は先生達に聞かせようと

「諸君は　これからの長い人生で一番大切なコトは何か知っているかな?　それはネエ　誰にでも笑顔で　挨拶することだよ　コンニチワ・アリガトウ・ゴメンナサイ　これが　すらすら言えるようになったらしめたモノ　生涯頼りになる親友ができるんだよ　三年間で　いい友達ができるように　笑顔で挨拶をするように　毎日練習をしような」

◎それから　私の挨拶が始った　空き時間で職員室にいる先生に趣味は?　好きな人は?　とかPTAで頼もしい人は?　とか雑談しているうちに　気易く話せるようになった　特殊な技能を持っている人は誰で　Pの委員になってくれそうなのは誰か　などとやっているうちに　いろいろなサークルが活動を始めた

◎茶の湯の会・俳句の会・短歌の会・陶芸の会　その他　私はどのサークルにも出席して　いろいろな友人ができ　遊びながら　学校経営を楽しんだ

◎その中で　茶道と陶芸には　私の方からのめり込んで　昭和五十年定年退職とともに　我が家の庭に　陶芸窯を据え　余生を専ら焼き物で楽しんでいる

当会文化祭出品作品（平成14年）

◎私が定年退職したある日K中の文化部長をやってたTさんが　やってきて　国立博物館の應挙館でお茶会をやる　ついては私に　お点前をやってくれと言う　私はK中を辞めてからもずっと　Tさんの茶室に通って　指導を受けていたのである

◎あの頃は大変でしたねえ　狛江市のKO中学と　うちの生徒　各々五十人ぐらいが　裏の松林で大乱闘をやった　その翌年に田中先生が来られたんだから　と十年前の思い出話に花が咲いた

◎私が　自宅で陶芸をやってる事を聞き伝え　当時の仲間が　茶陶を教えて下さいと　三三五五集って　月に一度のおしゃべりを　楽しんでいる

◎私は陶芸のアマチュアだが　陶芸の楽しみを指導するプロであると自認している

◇私の方針

①句読点廃止

②符号「　」（　）（?）（!）は使う

③一字空け　行変え

④なるべく常用漢字

加藤一雄さんと素敵な仲間たち

――作って弾いて楽しんで――

百合丘手製楽器アンサンブル
瀬川純子（すみ）

はじめに…

私が知っているのは、加藤さんの一部分でしかなく、私の文章力ではうまく伝えられないだろうし…どうしようかと加藤さんの奥様に相談したところ「あなたの思うように書いてくださっていいのよ。大丈夫ですよ…」と励ましてくださいました。写真を選び、新聞の切り抜きを見たりするうちに、あまりにもたくさん有りすぎるハプニングと、加藤さんを取り巻くユニークな方々との出会いを、久しぶりに思い出しました。私の思うままに書いてみたいと思います。

楽器との出会い

加藤一雄さんと初めてお会いしたのは、十九年ほど前の春。娘が幼稚園に入園した頃でした。「百合丘の公団に、楽器作りを教えてくれるおじさんがいるのよ…」と、娘の友達のお母様に紹介してもらったのが加藤さんでした。シュトライヒ・プサルターという名の、弦をこすって音を出す三角形の楽器で、初めて見る物でした。もともとはチロル地方で生まれた古楽器だそうで、日本では手に入りにくいので、自分たちで作って楽しんでいると聞いて、仲間に入れてもらいました。バイオリンの響きに似たこの楽器と、これもまた加藤さんお手製のハックブレットという打弦楽器とで、アンサンブルを組んで、演奏をするようになりました。そのころ活発に活動していた神奈川県ライトセンターの手作り楽器クラブは、毎月加藤さんを中心に楽器製作に熱心に取り組まれていて、色々な所からの出演依頼も多く、百合丘のメンバーも一緒に演奏させていただいておりました。横浜博の県のパビリオンや、社会福祉協議会のイベントなどなど…同じ幼稚園に通う子を持つお母さんや、親子で姉妹でと誘い合って、楽器を作り始める方が増え、できあがった楽器で毎週練習に集まり、麻生音楽祭や麻生文化祭等に参加するようになりました。ある時は市民館や小学校で、木琴や笛やチャイムの製作指導のお手伝いもさせていただきました。そして月日がたつうちに、楽器を作っている時とは違うたくさんの加藤さんと出会うようになりました。

あんなこともこんなことも

「お祭で小さい機関車走らせるから、乗りにおいで。」と言われて出かけて行くと、そこには長蛇の列。乗ってみたいのは、子供だけではありません。嬉しそうな顔をしているのは、一緒に乗っているお父さんやお母さん。学校の校庭でも、駅前の広場でも…小さいレールのそばには、いつも笑顔が並んでいました。

「今日はおもちゃ病院の日だから、見においで」と言われて買い物の途中にスーパーの二階を探してみると、そこには机と椅子と白衣姿の加藤さん。直ったおもちゃを受け取り、お礼を言って楽しそうに帰る親子の姿を見送る加藤さんは、優しい笑顔でした。

「楽器を作って初めて音が出た時は、みんななんともいえない嬉しそうないい顔するんだよね…」と笑っていた加藤さん。どこへ行っても嬉しそうな顔に出会う事が元気の源だったかもしれません。

パンフルート製作指導をする加藤さん

この町と電車と

平成五年の春、加藤さんの古稀のお祝いで箱根のレストランへ行った時の事。集合場所からロマンスカーの先頭車両に乗り込んで大移動の真っ最中、車内で演奏させていただいたことがありました。こんな事はめったにない…と思い、他のお客さまのご好意に感謝しながら、楽しく弾かせていただきました。

その年の夏、昭和五十八年から約十年間、地元のタウン誌「くらしの窓」に連載されていた「小田急よもやま話」が二冊の本にまとめられて出版されました。書き始めたころは、こんなにも長く続けられると思っていなかったとのことでしたが、たくさんの方のご協力によって、鉄道愛好家の方だけでなく、地域の方々にも読んでいただける本ができあがったことを、喜んでおられました。

近隣の懐かしい風景や駅舎などの写真は、三十七年ほど前に王禅寺に住むようになった子供の頃の記憶につながっています。電車に詳しくない私に、車両に書いてある記号の意味や踏み切りの話を、楽しそうに説明して下さったことを今でも思い出します。

“機関車を走らせよう”「みなみゆりまつり」で

人とのつながりに感謝

半分冗談だと思っていた、演奏旅行の話が、現実のものとなったのが、平成七年のことでした。お手製の楽器を持って、川崎市の友好都市であるオーストリアのザルツブルクで開催される「ジャパンウィーク」に参加し、祝祭小劇場での「川崎ナイト」で演奏をするという企画でした。「みんなで行けるなんて嬉しいよ…」と言って、どんどん準備を進める加藤さんでしたが、子育て中の主婦にとっては大事件。でも、同じ楽器を作った仲間と一緒に、楽器の故郷へ行けるチャンスなんて、もう二度とない事だと思い、家族の協力を得て参加しました。一般のツアーとは違って、楽器を抱え地図を見ては、徒歩で移動する事も多く、あちこち寄り道をしたい加藤さんをせかしながら、街中を歩き回ったこともありました。そして、七日間に及ぶゆかいな仲間たちとの珍道中は、私たちの絆を深めるものとなりました。

ハックブレット（左端・加藤さん）とブサルターの演奏［'96麻生音楽祭］

加藤さんが亡くなられて八年が過ぎました。加藤さんが文化協会で副会長を務められていらした頃から、ずっと変わることなく私たちを応援してくださった皆様。ほんとうにありがとうございました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

加藤一雄様

加藤さん、私たちは元気です。あのころより少し歳を重ね、それぞれの事情で一緒に演奏することが難しくなったり、故郷へ帰られたりで、アンサンブルとしての活動はコンパクトになりました。でも家族や地域を支えて、自分自身の活躍の場を持ち、がんばっている人ばかりです。

加藤さんがお元気だったときと同じように、今でもデイサービスなどで演奏させてもらっています。用意していない曲をリクエストされたり、急にアンコールの声ががかったりと、予期せぬ出来事が多々あるのは以前と変わりませんが、冷や汗をかきながらも顔は笑顔で乗り切ります。ずうずうしくなりました。

細々とですが、私たちの挑戦はまだ続いているようです。もう少し応援してくださいね。

デッサン会

「舞台衣装の女優さんを描く」

今年も、恒例の「舞台衣装の女優さんを描く」デッサン会が、六月四日(日)、麻生市民館大会議室で開催された。

モデルは、劇団「民藝」の前田真里衣さんと上條和佳奈さん。前田さんはロングヘアーに、外部公演でのマダム・バタフライ役の袖を取った状態のロングドレス姿で妖艶さを醸しだす。上條さんは、けいこ場公演「高野の七福神」での、素頓狂な堅田比奈子役の衣装で、ショートカットに普段着姿で清楚な印象。

常連も含め、四十数名の参加者は、それぞれ好みの画材を持ち込んで場所を確保し、鉛筆を削ったり水彩絵の具用の水を汲んだり、墨を摺ったりして、モデルがポーズをとる時刻を待つ。

デッサンが始まり、会場に、やや緊張感のある空気が漂う。白い画用紙や木炭紙、スケッチブックは時間の経過とともに線や色で埋まってゆく。

参加者は年配者が断然多いが、その目はモデルと画面とをひたすら往復し、自分だけの世界に入り込んでゆく。

共有された場所と時間は、それぞれの感性豊かな作品へと参加者の筆を走らせた。

休憩時間がくるとすかさず、「描いた絵にサインを」と、モデルに声をかける人。描かれた絵を見て微笑み、快くサインをする女優の二人。ふれあいが嬉しい。

舞台衣装だけでなく、役の顔であるモデルの面白さを満喫して描ける、年に一度のデッサン会。「毎年楽しみにしています」「モデルが必要な『人物』ですから、素人にとってこの会はありがたいのです」という声をいただいた。(松田洋子)

上條和佳奈さんを描く参加者たち

夏休み親子教室

「ふるさと麻生の暮らし」

担当　杉本長治　山田芙美子　関森田鶴子

当文化協会は、区の魅力ある区づくり推進事業で、「ふるさと麻生」の本とDVD「わらべ唄」を今年三月に完成させました。

これは地域の人々が育み、伝えてきた歴史や行事、民話、伝承、わらべ唄、暮らし等から先祖の心や知恵を読み取り、子供たちがこれからの生活に活かしていってもらうことを願って作られたもので、各小中学校に配布されました。

「夏休み親子教室」においても「ふるさと麻生」と「DVD」を活用した講座「麻生区の暮らしを調べる」が開かれました。参加した子供たちは楽しそうにわらべ唄を歌い、昔から伝わる話を珍しそうに聞きました。また区役所入口に茂る「からむし」に手を触れたり、図書館で地域に関する本の説明を受けるなど、地域に向けられた子供たちの姿がありました。

(関森田鶴子)

「夏休み親子教室」でDVDを見る参加者

《参加者の感想》

西生田小学校五年　若島拓未

ぼくは杉本先生のお話を聞きました。

とくに良かったのは、「あんたがたどこさ」をみんなで歌った時です。なんだか元気がわき出てきました。

もう一つは、ご先祖様をまつるお盆に、なすで牛を作り、キュウリで馬を作ってなくなった方をおむかえするため、墓の方にむかせておくお話を聞けた事です。ぼくもやってみようと思いました。

夏休み親子教室に、また参加したいです。

新しい伝統の創造を
――会長退任にあたり――

前会長　杉本長治

貸家と唐風で書く三代目

川崎の文化の生みの親・育ての親である藤田親昌さんが初代会長。二代会長は天文学者であり歌人でもある箕輪敏行さん。さて、三代目は…。

見出しの江戸川柳のように「麻生区文化協会の屋台骨を傾けてはならない」と必死な会長職であった。何とか勤めは果たせたのではないかと思うが、これは自己満足かもしれない。

麻生区文化協会

麻生区文化協会は次の理念で創立された。

○地域を挙げての文化協会に
○新しい質の高い文化協会を

会長として、この理念をどれだけ実現できたか。勿論会長一人でできるわけではない。ただ、会長としてどれだけリーダーシップを取り、会員一人一人の力を活かせたか反省しきりである。

会員を信頼

「古風七草粥の会」は文化協会の薫り高い行事で細山郷土資料館で会員の親睦・新年会として一月末に開かれていた。

ところが、「郷土の伝統ある行事に、多くの区民に参加を」との声が文化協会の会員や区民から上がってきた。そこで、「区役所広場で一月七日に開催」と提案した。

「一月七日は主婦は一息つく時期である」「正月早々七草採りなんて」など、否定的な意見も強かった。当然なことである。しかし、会員の多くの方の理解・協力によって、第三回を迎えることができ定着の感がある。

「夏休み親子教室」も心配していたが、十八年度は十三講座が成立した。会員の麻生区文化振興に対する理解・情熱の現れである。

これからも、行政の支援をいただき、質の高い文化の振興に皆様が活動されることを期待したい。

ただただ感謝

会員の皆様は、六年間、非力な私を支えてくださいました。反面ご迷惑をおかけしたこともありました。しかし、去る七月一日にはホテル・モリノにおいて、私の会長退任に伴う会を盛大に開いてくださいました。ただただ感謝し、お礼を申し上げます。

これからは、京会長を中心として麻生区文化協会の活動が活発化し、新たな伝統の創造がなされることを期待し、併せて会員の皆様のご多幸をお祈りし退任のご挨拶とさせて頂きます。

「感謝する会」で、あいさつをする杉本前会長

おつかれさまでした
――前会長に感謝する会――

杉本長治氏は、六年間にわたり当文化協会の会長を務められ、十七年度をもって会長を退任されました。その多くの足跡を称え、慰労する「杉本前会長に感謝する会」が、去る七月一日、ホテル・モリノにおいて開かれました。

第一部は、「種を蒔く…」と題した杉本前会長による講演会。第二部は、前会長を囲んでの和やかな懇親会です。

杉本前会長は、平成十一年に「川崎市文化賞」を受賞されましたが、それは東橘本小での「障害児教育」と久末小での「地域に根ざした教育」の実践が評価されたことによります。

その具体的な実践例を中心にしたお話の内容は、深く私たち出席者の心に響きました。「種を蒔き、育てる麻生区文化協会へ」と結ぶ前会長の会員への期待。会員一同、それに応えていきたいという思いを強くする講演会でした。

（松田洋子）

会員の活躍

川崎洋蘭クラブ

創立以来十五年、麻生区を中心に五十名に上る会員を擁し、毎月の例会を通して洋蘭栽培の研修に努められました。その成果が実り全国・県内各地の展示会に入賞しその実力は広く認められるところです。

このたび、世界二十四か国が参加した「世界らん展日本大賞２００６」（東京ドーム）において、アマチュア・ディスプレイ部門最優秀賞（第一位）を獲得されました。

題名の「なごみのとき」の通り会員の和と協力が勝ち取った栄冠です。

世界らん展日本大賞2006「なごみのとき」

井上恵美子氏

幼少の頃より日本舞踊・バレエに親しみ、一九八六年スタジオ設立、自主公演を開催し、文化庁芸術家在外特別派遣に選ばれ、東京新聞全国舞踊コンクールにおいて指導者大賞を受賞されました。

このたび、井上恵美子ダンスカンパニー公演「ｂｒｉｇｈｔ」の成果により、平成十七年度文化庁芸術祭舞踊部門優秀賞の賞を受賞されました。

受賞理由として「このところ創作に充実振りを見せている井上恵美子は、自身の人生を重ね合わせたような主役をも踊り演じた。ともすれば時の流れに押し流されそうになりながらも、若い人々にも気を配りつつ懸命に前向きに生きる中年女性を中心にした作品。奇をてらわぬ素直な境地を示し、日本独自の和やかなモダンダンスを創造している。」と述べています。

箕輪敏行氏

麻生区文化協会二代会長としてご指導して下さった先生が、このたび、米寿を記念して歌集「太白星」を出版なさいました。

先生は現在、日本天文学会・日本農業気象学会・東亜天文学会・歩道望雲社・土曜会・川崎天文学会に属され、細山郷土資料館長を勤めていられます。

歌集「太白星」の後記に

星降る夜のしづけさよ

仰ぎみる空より妻よ地球に還れと亡くなられた奥様への思いを歌われています。

またこのたび、高齢者叙勲、瑞宝双光賞を受賞されました。

若柳吉静氏

四歳の頃より藤間流に師事し、終戦直後、若柳流の名取になりました。

昭和二十五年、社団法人「日本舞踊協会」に入会し、このたび永続舞踊家として表彰されました。

文化協会主催の夏休み親子教室が始まって以来毎年、小学生の希望者に講師として日本舞踊を指導しています。

（山田芙美子）

「会員の活躍」情報を広報部へお知らせください。会員による紹介、自己紹介等、どの方法でも結構ですが、誌面の都合により、掲載できない場合もあります。

「広報部員」も募集中です。

（広報部）

編集後記

「からむしってなに?」

何のむし?

食べられるの?

ちょっとがっかりの会話です。

麻生区は、八世紀ごろから朝廷への貢物とした麻布の原料である苧麻（からむし）が広く産した地であったとされ、そのことから「麻生」の名が誕生したといわれています。

区役所前広場の植え込みの中に見つけてうれしくなりました。

（山田記）

松田洋子・関森田鶴子・山田芙美子
田口正太郎・千坂隆男

麻生区文化協会会報
からむし　第四十一号
平成十八年九月三十日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　京　利幸
編　集　麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎　〇四四―九五一―一三〇〇